栞集を読む

松岡　隆子

蛇穴を出づるか戦地とはいへど　　三宅まどか

ロシア軍のウクライナ侵攻からもう一年余り過ぎた。日本では啓蟄のころ、ミサイルや無人機の攻撃が続く戦地では地中の生き物たちはどうしているのだろう。冬眠から覚めて地上に出てくることができるのだろうか？　軍事侵攻は激しさを増すばかりで終戦に向かう動きは全く見られない。同時作の〈逃水の向かうに平和あるやうな〉は、世界の全ての人々の祈りを見る思いがする。

町空の今日より広し燕来て　　見上　恵

歳時記を見ると、燕は春の社日のころに来て秋の社日の頃に帰るとある。社日とは春分、秋分に最も近い戊の日。即ち春分の頃になると燕の姿が見られるようになるのである。風を切って飛ぶ燕の姿に青空が拡がってゆく。〈町空の今日より広し〉に春の到来の喜びがあふれている。

陽炎に溺れてしまふかも知れぬ　　鈴木　富代

春のうららかな日に遠くのものがゆらゆらと揺らいで見えることがある。日射しのために熱くなった空気で光が不規則に屈折されて起る陽炎という現象である。陽炎の中の景はぼんやりとして形を成さない。ことごとく揺らいで見え人の姿も定かではない。陽炎の中に佇むわが身を想像したとき、陽炎に囚われて現実に戻ってこられなくなりそうな不安に駆られる。溺れてしまいそうだという感覚は陽炎の本質をよく捉えていると言えよう。

ヴェネツィアングラスの赫に霞草　　西島　美晴

ヴェネツィアングラスはイタリアのベネチアにあるムラーノ島で作られるガラス工芸品である。色鮮やかで優しい透明感のあるヴェネツィアングラスの美しさ、特に赤いヴェネツィアングラスの美しさは格別だ。赤いヴェネツィアングラスの花瓶に溢れるほどの霞草を活ける。清楚な霞草の白とヴェネツィアングラスの赤とで描く美の世界が視覚に迫る。

今日だけは嘘はつかぬと四月馬鹿　　浅尾　泰昭

「四月馬鹿」は「角川俳句大歳時記」では「この日に限り嘘をついて人に無駄足を踏ませたり、罪のないいたずらをしてもかまわないという風習がある」と書かれている。社会では堂々と嘘が横行している現実を思うと、いささか馬鹿々々しくなってきた浅尾さんは、せめてこの日だけは嘘はつかな

いと断言する。四月馬鹿の風習を逆手に取ったようなアイロニカルな句に共感を覚える。

もんぺにもよそ行きありし昭和の日　高野　達子

4月29日は長年天皇誕生日として親しまれてきた祝日だが昭和天皇の崩御により「みどりの日」となり、更に平成17年に「昭和の日」と改められた。「激動の昭和の日々を経て、復興を遂げた昭和の時代を顧み、国の将来に思いを致す」ことを趣旨に制定された「昭和の日」は、昭和史の大方を生きた世代には「みどりの日」より親しみを以て受け入れられた。

もんぺは戦時中の女性の日常着であった。木綿の物は普段着、上下お揃いの絹の生地で作ったものはよそ行きだった。大切な着物を解いて作ったもんぺには、激動の昭和を生き抜いた女性たちの思いが籠っている。

不覚にも大朝寝して日の眩し　桑原　和子

「春眠不覚暁」の春の朝である。快い眠りから覚めがたく朝寝をすることが多い。桑原さんも現役の頃は睡眠不足の状態で勤めに出たり家事をされていたに違いない。今は存分に朝寝を楽しめる。たまには大朝寝も許されよう。日の降り注ぐ食卓で遅い朝餉を楽しむ。幸せな晩年の一齣である。

ととのひし庭や鶯来るころか　鈴木美代子

松の新芽も摘まれ庭木の剪定も済み、明るくこざっぱりとした庭になった。もうすぐ鶯が来て美しい声を聴かせてくれることだろう。鶯の頃は鶯を聴いて暮らす。鈴木さんは前掲句の桑原さんと同世代である。ここにも晩年の平穏な暮しがある。

春昼の猫には猫の用があり　宮当　信行

春は猫の恋の季節、飼い主であるご主人様には目もくれずいそいそと恋路を辿る。和歌や連歌では鹿の恋は雅とされ盛んに読まれたが、猫の恋は卑俗とされ詠まれなかった。芭蕉が好んで詠んだことにより俳句で読まれるようになったのである。〈麦飯にやつるる恋か猫の妻　芭蕉〉。概ね猫の恋をストレートに詠んだものが多いが、掲句はそれを婉曲に詠んでいて味わいがある。

その他の印象句

一陣の風に乱るる花筏　梅澤　惇子
ふらここに腰掛け遠き雲を見る　早出　誠治
灯籠の後ろのしじま落椿　小川テル子
境内の杉のあはひへ春の蝶　小泉　恵子
地方選つつじの丘のかしましく　森田　道子
流氷去りて残さるる鮭の群れ　安達みわ子
敵機来ぬ空を楽しむ鯉幟　森口　誠
反抗期少し早めや葱坊主　加々美敦子
托鉢僧声を残して花の奥　高橋いはを
昨今の時の流れや藍微塵　堀　すみ江
春の滝力増しつつ落ちゆけり　露木　崇夫